

NICE SMILE

2013
新春
VOL.54

地方独立行政法人 りんくう総合医療センター ● 院外・院内広報

発行・責任者：広報誌編集委員会委員長 永井 義幸 / 〒598-8577 大阪府泉佐野市りんくう往来北2番地の23 TEL072-469-3111(代) FAX072-469-7929
http://www.rgmc.izumisano.osaka.jp/



スタッフ集合写真
りんくう総合医療センター 2階 エントランスホールにて

年頭挨拶



りんくう総合医療センターは
飛躍の年を迎えました

理事長 八木原 俊克

昨年、我が国における医療界最大の話題は、山中伸弥教授がiPS細胞の研究に対する業績でノーベル医学生理学賞を受賞されたという明るいニュースでした。近年、医学の発展に伴う医療技術の進歩は目覚ましいものがありますが、今後さらさら飛躍し続けることを予感させる大きなトピックスだったと思います。

一方、これまでの進歩がもたらした恩恵を常に吟味しながらも広く社会に還元し、医療の質の向上に努めなければならぬ地域の基幹病院としての責務を感じています。その役割の一つとして専門医療がもたらした高度な医療技術をこの地域に普及させることは大きな方策であることは間違いありません。

しかしながら、高齢化社会の進行による疾病構造には地域性があり、さらには複数の疾患が組み合わさる多様化と治療の複雑化も進んでいます。したがって、個々の患者さんに適正な専門医療を適正な時期に提供し、細やかな医療の質の向上に努めるためには、病院において、地域において、急性期から慢性期、さらには介護から在宅に至るまでの全ての医療の流れの中で一層の

緊密な連携が必要になってくるのではないのでしょうか。

りんくう総合医療センターは独立行政法人化してからこの4月でちょうど2年になり、同時に大阪府立泉州救命救急センターと統合する予定になっていくことは既にお知らせしたとおりですが、当センターではこの統合を「飛躍」のための大きなチャンスと捉え、現在、職員が一丸となつて準備を整えているところです。新しいセンターでは医療スタッフ数の回復に伴い、各診療科間、各職種間の垣根をできるだけ低くしたチーム医療を促進し、高度な専門医療と総合診療との連携と協働を図ることによって医療の質の向上を目指しています。

また、これからも進化し、変貌してゆく医療をしっかりと支える医療人を地域で育成することを重要なテーマとし、患者さんに優しい、そして医療従事者にはやりがいのある病院への飛躍を目指しています。さらに、この地域の大きな特徴である病々・病診連携をはじめとする地域連携の一層の促進を図りたいと考えています。

今年も引き続き皆様方のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

CONTENTS

表紙写真：「スタッフ集合写真」	1
「年頭挨拶」 理事長 八木原 俊克	
「年頭挨拶」 病院長・大阪府立泉州救命救急センター所長	2
「年頭所感」 各部署長	3～13

第1回りんくう秋まつり！2012	14
りんくう公開健康セミナー	
編集後記/人権標語	

年頭挨拶 2013

年頭のご挨拶

病院長 伊豆蔵 正明

当院は平成9年に現在地に新築移転した後、より一層の高度専門医療を目指して機能を充実させて参りました。平成23年4月には運営形態を変更し、地方独立行政法人りんくう総合医療センターとなりましたが、さらに本年4月には、隣接する大阪府立泉州救命救急センターと一体化し、一つの病院としてスタートする予定です。

地域の救急医療においては、泉州救命救急センターは三次救急を、当院は主として二次救急を担当する医療機関でありました。その中で、平成23年度からは出来るだけ両病院が協働して診療にあたるように努めて参りました。統合後はさらに効率的な運営により、専門医療と救急医療とがうまく融合した医療を提供できるように努力して行く所存です。

この広大な泉州地域では、地域医療連携の重要性は早くから認識されており、限られた医療資源を有効に活用することが大切です。当院は平成23年11月に地域医療支援病院の認定もいただき、ますます泉州南部における地域医療の基幹病院としての責務が大きくなっているものと考えています。今後も各医療機関との連携を円滑に行えるように、お互いの理解と様々な工夫が必要であります。そのため、地域連携パスの推進や診療情報ネットワークの構築等も有用なツールであり、さらに推進して行きたいと考えています。

また、関西国際空港にも近い病院として、医療の国際化も当院の重要な使命の一つであります。この分野では、今まで培ってきたシステムをさらに進化させ、日本のリーダー的役割を担うことが期待されており、国際診療科も人員が増え、より一層活発な活動を行いたいと思っております。

当院では、まだマンパワーが不足する部門もありますが、時代のニーズに合った様々な方面への迅速な展開を進め、今後とも地域医療の発展に貢献したいと思っております。

皆様方の御指導、御協力のほど、宜しくお願い申し上げます。

高度専門医療と救命救急医療の融合

地域の安心のよりどころとして、皆様に信頼される病院を目指します。

大阪府立泉州救命救急センター所長 地方独立行政法人りんくう総合医療センター副病院長

松岡 哲也

平素より、りんくう総合医療センターならびに泉州救命救急センターの運営に、多大なご尽力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、両センターは本年4月に統合され、一つの医療機関となる計画が進められております。りんくう総合医療センターはこれまで、泉州南部唯一の地域医療支援病院として当地域医療の中心的役割を担ってまいりました。一方、泉州救命救急センターは、人口92万人の泉州二次医療圏唯一の三次救急医療機関として救急医療における「最後の砦」の役割を果たしてきました。

この両センター統合の意図するところは、「高度専門医療と救命救急医療の融合」により、それぞれの機能を一層強化することにあります。泉州救命救急センターでは、これまで培ってきた自己完結型の迅速かつ的確な質の高い救命医療に、りんくう総合医療センターの高度な専門診療機能を付加することによって、重症専門病態に対する診療機能の充実を図ります。一方、りんくう総合医療センターの専門診療科では、超高齢社会

において求められる様々な合併症を有するハイリスク症例に対しても、泉州救命救急センターの総合的な重症診療機能を活用することによって、安全に高度な専門医療を提供する体制を確立します。

すでに、両センターでは統合に向けた様々な取り組みを行っております。泉州救命救急センターでは、重症管理機能の更なる充実を目的に集中治療病棟を増床し、りんくう総合医療センターの専門診療科と協働して、脳卒中、循環器救急患者受け入れ窓口の一元化や、緊急手術を必要とする外科的急性疾患に対応する急性期外科センターの設立などを行い、重症救急患者に対する診療体制を強化しました。一方、りんくう総合医療センター内に泉州救命救急センターと協働して二次救急医療を担う救急科を新設し、かかりつけの患者様の急変に対応できる体制を確保しました。

泉州救命救急センターを統合したりんくう総合医療センターは、他の医療機関や診療所などとの連携をさらに深め、地域住民の安心

右から、伊豆蔵病院長、松岡所長





副病院長
感染センター長
院内感染対策室長
輸血部部長

玉置 俊治

年頭の御挨拶

新年おめでとございます。
当院は一昨年4月地方独立行政法人に移管され、りんくう総合医療センターと改称されました。大阪府立泉州救命救急センターとも平成25年4月には統合予定で、すでに統合に向け、循環器救急、脳外科救急などの相互協力、救急科への救命救急センターよりの医師の派遣、研修医の指導など連携を強めており、統合後は救命救急医療と高度専門医療が合体し相乗効果を発揮できるものと思えます。

平成9年10月市立泉佐野病院の新築移転以来、平成6年開設の、大阪府立泉州救命救急センター、市立感染症センターと緊密な連携をとるために「りんくう総合医療センター」と総称していたのですが、今年は大阪府泉州救命救急センターとも有機的に統合することにより、名実ともに当初から理想としていた「りんくう総合医療センター」に進化します。

諸事情によりここ数年、内科系スタッフが減少し診療に支障をきたすようになってきていましたが、昨年、大阪大学に地域医療再生基金を用いた総合地域医療学寄付講座が開設、また近畿大学呼吸器内科学にも寄付講座が開設されました。寄付講座の教官が当院へ外来診療や病棟の指導のために派遣されるとともに、大阪大学の血液・腫瘍内科から柿本綱之部長、内分泌代謝内科から倉敷有紀子副院長が常勤医として赴任され、当院の内科もようやく活気を取り戻してきています。

私は平成3年の着任以来、病院の新築移転、内科系の体制作りや研修医の指導に関わってきましたが、本年もさらなる発展のため微力を尽くす所存ですので皆様方のご支援をよろしくお願いいたします。



副病院長
地域連携サービスセンター長
心臓センター長

永井 義幸

2013年を迎えてもこの病院を知ってほしい市民のかたがたにも、職員にも!

2013年を迎えました。今年4月にりんくう総合医療センターと泉州救命救急センターとの名実ともに統合を控えており非常に大事な一年になります。

昨年11月頃から我々職員に統合を大きなチャンスととらえて更なる飛躍をしたという意識意欲の大きな高まりをサポートし、また病院を利用される周辺住民の方、医師会の先生方へのお知らせを目的に院内、一部院外に統合へのお知らせのポスターを作成し掲示させていただいております。作成に当たっては両病院の職員の方々には勤務多忙の中、2階エントランスホールや救命救急センター前に集合していただき写真撮影にご協力いただきありがとうございました。2つの病院の背景に青空がひろがる写真を使っております。

両病院をあわせると医師約1300名、看護師約430名およびコメディカルや派遣職員の方々、事務系職員をあわせると総勢約820名の職員が集うことになりました。数は力ではありませんが患者さま、市民、医師会、病院職員にとって頼もしい陣容が出来上がります。これからももっとみんなにこの病院のことを知ってもらいたい。知ってほしいと職員一同がおもうようになればと願っております。放射線科の行様、メディカルクラークの川崎様、経営管理課の佐々木様、看護部の方々ほか病院広報にご協力いただいている職員のご尽力に感謝いたします。



副病院長
看護局長

増田 紀子

年頭所感

平成20年、看護局長に就いてから、泉州広域母子医療センター開設・病院機能評価の受審・地方独立行政法人化への移行・救命センターとの一部共同運営(工事期間中の患者受け入れ・5山病棟の新設・救急科の設置)・ICUの増床などたくさんのお仕事やイベントがありました。これらのことは、常に看護人員や看護体制の整備に関連し、それらの調整に追われ現在に至っております。

今年25年度におきましては、救急医療の更なる充実を目的に、りんくう総合医療センターと大阪府立泉州救命救急センターが一体化するという大きなイベントがあります。りんくう看護局と救命看護局はその一体化を見越し、24年から看護目標を共有し「1つの病院、「りんくう総合医療センター」として看護の力が発揮できる体制づくり」お互いのよいところを認め合いながら前進しようーを合言葉とし、取り組んでまいりました。焦り・不安・焦燥・期待さまざまな感情が看護師から聞かれます。25年4月まであとわずかに迫ってまいりましたが、まだまだ課題は山積しています。一つずつ丁寧に理解を求めながら進めていきたいと思っております。看護はチーム医療の要であります。2つの病院の看護師が1つのチームとして活躍できるように、精一杯の調整を行っていきたくと思っておりますのでご支援、よろしくお願いいたします。



事務局長

田中 寛

今年も正念場

あけましておめでとございます。
昨年の4月から、病院の事務局長として働いております田中です。昨年は、皆様には大変、大変、苦勞をおかけしました。本年は、今までどおりにご協力を頂きながら、病院改革に向けて頑張っていきたいと思っております。

- ① 私たちの使命は、より良い医療を患者様に提供することです。
 - ② 私たちの給料は、診療報酬から頂いています。
 - ③ 病院の運営は、人です。人の輪です。
- 老兵ですが、この病院でホウレンソウ(報・連・相)を立派に育てていきたいと思います。よろしく申し上げます。



診療局長
安全管理室長

久場 良彦

年頭所感

あけましておめでとございます。

診療局長兼麻酔科部長の久場良彦でございます。もう一つ院内では医療安全室長を兼務しております。麻酔科の仕事は手術中の患者管理、それには取まらず、術後鎮痛を含む周術期患者管理、ペインクリニック外来、緩和ケアなど幅広くなっております。麻酔科を充実することにより患者さまの安全安楽が向上すると考えています。

また、医療安全室はこれからの医療の中で、患者さまの安全、利益にまた医師、コメディカルが安心して働けるようにするために、重要な役割を担っていくと考えています。

りんくう総合医療センターが発展し泉州地域の中核となることを願って、挨拶に変えたいと思っております。

年頭所感



膠原病内科部長
リウマチセンター長

入交 重雄

寒冷の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。当院は2013年度に隣接している大阪府立泉州救命救急センターと統合し、救命救急を含めた高度な救急診療と専門性の高い診療機能を合わせ持つ新たなりんくう総合医療センターとなり、これまで以上に泉州地域への医療貢献が可能となります。

また、関西国際空港に近い当院は、2012年から在日米国退役軍人検診施設となり、2013年には昨年7月に創設された制度である「外国人患者受入れ医療機関認証制度」の認証取得を見込んでいます。

これらにより、ますます国際化対応医療施設としての発展が期待されます。私も微力ながら、内科・膠原病内科・関節リウマチ分野における医療および国際化に貢献できるように取り組んでいきます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



腎臓内科部長

坂口 俊文

昨年4月に赴任して、あわただしく過ぎた9カ月でした。前任の先生方の御配慮によりなんとか初期の混乱を乗り切り、体制固めの基礎ができたと思います。今年はその基礎の上に、独自の体制を作りたいと思っております。昨年から始めております近隣の透析施設で透析を受けておられる患者さまのシャントの修復をもっと充実させるとともに、腎不全予防にも力を入れたい

と思っております。



血液内科部長

柿本 綱之

平成24年4月に新たに赴任、慌ただししい毎日の連続であったという間に時が過ぎ、平成25年となりました。患者さんに対して常に最善の医療を提供すると同時に、日本中どここの病院でも同じなのですが、医療経済も加味しそれぞれの病院事情も鑑み、いずれにも最善の医療を提供するためにベストを尽くすこれがいかに困難であるか痛感する毎日です。

血液疾患の発生頻度はそれほど高くないにも関わらず、近隣病院の事情等により、当院に患者さんが比較的多く集まるため、今年もあつという間に時が流れていくことでしょう。忙しく仕事に追われようと、せめて心にだけはゆとりを持ち精進して参ります。今年も何卒宜しくお願い申し上げます。



肺腫瘍内科

森山 あづさ

今年はい局で2回目のオリンピックを観ることができました。2007年に当院へ赴任してから気がつけば早くも5年が過ぎていたのです。2008年からは呼吸器内科から肺腫瘍内科と名称を変え、肺腫瘍を中心とした胸腔内の癌に特化した診療を行っております。相変わらず常勤としては一人診療が続いておりますが、呼吸器内科は平日、非常勤の先生が毎日外来をして下さるようになりました。また、このような当科の状態でも近隣の先生からは多くの癌患者さん(癌疑い)を紹介して頂き、院内・院外ともに助けて頂きながら大

きな問題もなく診療を続けることができていると、感謝しながら日々診療を行っています。

肺癌に限らず、癌診療の中で特に化学療法については、ここ10年で大きく変革の時を迎えました。従来の副作用の強い殺細胞性の抗癌剤から癌細胞の遺伝子レベルでの標的を狙う分子標的薬が飛躍的に臨床の場に出てきているのです。臓器を超えて、個々の患者さんに合わせた腫瘍縮小効果の高い薬剤を選択する治療法の選択肢が増えてきています。しかし、癌腫にとつては再発までの期間が延びたり、生存期間が延長されて良い結果をもたらしてはいますが、肺癌に限定すれば手術適応の無い場合は完治には程遠く、まだまだ厳しい状況には変わりありません。

この先何度、医局でオリンピックを観ることができると楽しみにしながら、今後とも長く診療を続けてゆきたいと希望しております。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。



神経内科医長

宗田 高穂

医療崩壊が叫ばれるようになって久しくなりましたが、改善の見通しはいまだに立っていない状況です。この南泉州地域も例外ではなく、特に内科系医師の不足は数年来からの懸念事項となっております。

神経内科におきましても、りんくう総合医療センターで1名の人員での診療を余儀なくされています。少ない人員であっても診療の質を落とすことなく、良質な医療を提供できるよう努力してまいります。微力ながら南泉州の医療に貢献できるよう精進してまい

ますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。

循環器内科部長

武田 吉弘

昨年度から、救命救急センターの先生方と協調して、循環器の救急治療を行うことになった。その結果、多数の救急患者を受け入れることが可能になり、救急患者数が増加した。旧来の循環器医師だけで治療にあたっていた時期と比べ、救命救急の医師に対し、それぞれの診断過程や、治療の意義を説明する必要も生じ、多くの「対話」も生まれてきているように思う。

各循環器医師にとつて、レベル・アツプする良い機会となり、「対話」に感謝している。これらの「対話」を、救命科のみならず、他科の先生方とも進めることで、本年度は、より円滑な運営と診療を行ってゆきたい。



がん治療センター長
外科主任部長

位藤 俊一

新年、あけましておめでとうございませす。旧年中は各科先生方、薬剤師、看護師、検査技師、地域連携室、診療情報管理室、相談支援センターやメディア力クルークをはじめ様々な部門の皆様にご協力いただき、チーム医療を実践することができました。この場をお借りし心より感謝いたします。本当にありがとうございます。最近では病棟回診をしていまして、患者さんやそのご家族からりんくう総合医療センターに来て本当によかったとお言葉をいただく機会が増えました。このことはチームが一丸となつて強みを生かす

●ことにより、不利な環境をも乗り越えるパワーに繋がり、またスタッフのモチベーションを上げる出来事となりました。きびしい中にも楽しさを共有できる、プロフェッショナルなチームを目指し、柔軟かつ大胆な発想を展開したいものです。

地域の先生方からご紹介いただく日常的な緊急手術症例等への対応はもちろんのこと、最新のデータやエビデンスを吟味し、よりよい診断、治療を、的確かつスピーディに提供できるように、日々邁進していく所存です。本年もご指導、ご鞭撻のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。



消化器センター長
外科部長

水野 均

昨年は日本ヘルニア学会や日本腹腔鏡下ヘルニア手術手技研究会という、鼠径ヘルニアに関するかなりdeepな会に参加する機会がありました。鼠径ヘルニアといえば、以前は若手の医師の手術手技のトレーニングというイメージがありましたが、最近では手術方法も様々なものがあり、とくに鼠径ヘルニアという良性の疾患であるだけに、再発をいかに少なくするか、術後の痛みなどの症状をいかに抑えるかといった患者さんのQOLを保つための工夫が議論されています。

当院でも、鼠径ヘルニアに対する術式はプラグ法、クーゲル法、腹腔鏡手術など多くの選択肢があり、それぞれの患者さんに最適な術式を選択できるようにしています。

ヘルニアに限らず、すべての患者さんに対して、それぞれに最適な医療が行えるよう、我々外科医も、日々研鑽していきたくと思っています。



小児外科部長

飯干 泰彦

りんくう総合医療センターに赴任して5年目になります。日勤帯は急性虫垂炎やヘルニア嵌頓をはじめとして救急疾患にも対応しておりますが、小児外科は医師ひとり体制ですので、夜間、休日の緊急には対応できておりません。泉州地域の小児医療にすこしでも貢献できれば幸いです。



救急診療部長
脳神経センター長
脳神経外科部長

森内 秀祐

患者様より信頼される脳神経センターを目指して日々精進しております。4月より救命救急センターの統合により、SCU・ICUなどの管理体制が充実し、より安心な体制となります。脳神経センターは脳神経外科、脳血管外科、神経内科の医師6人(脳神経外科医5人、神経内科医1人)を中心に、診療にあたっております。

救急疾患や慢性疾患も含めた脳神経疾患全般(脳脊髄腫瘍、脳卒中、パーキンソン病、正常圧水頭症など)に対し、専門性の高い治療を提供しています。当科のモットーは、脳神経疾患が生活の質に大きく関わるため、治療方針を、患者様の身になって考え、この病院にきて良かったと思っただけけるような治療の提供を目標にしています。



脳血管外科部長

寺本 佳史

新年、あけましておめでとうござい
ます。

旧年中は諸先生方をはじめ、各部門

の皆様にご協力いただき心より御礼申し上げます。

脳卒中治療における脳血管内治療は、海外で実績のある新しい医療機器が次々と国内で承認され、必要不可欠な治療となつてきております。このため泉州地域での治療を行える当センターは、脳卒中診療において重要な役割を担っております。今年も府立泉州救命救急センターとの統合合併が予定されており、救急患者の受け入れ体制も整備され、救急患者さまが増えると思われれます。皆様方には多大なご面倒をおかけすることもありますが、本年もよろしくお願い致します。



心臓血管外科部長

松江 一

新年、あけましておめでとうござい
ます。旧年中は皆様方のご支援を賜り御礼申し上げます。本年も引き続き、ご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い致します。

近年、循環器疾患の治療を要する患者様は、高齢化、他疾患の併存などにより、ますますハイリスクとなっております。急性期治療のみでは生命予後、生活の質の改善が得られない場合もあり、患者様、かかりつけの先生方(病診・病病連携)、専門施設が協力し、地域に根ざした診療を行っていくことが大切です。

昨年より導入された泉州救命救急センターとの循環器救急一元化ですが、本年は正式に両施設が統合し、更に質の高いものとなります。また、当科では、従来の心臓血管手術に加え、体にやさしい大動脈カテーテル治療などの低侵襲治療を発展させ、地域に貢献できる診療科を目指します。

形成外科部長

中川 達裕

形成外科といえば、ひと昔前は字面が似ていることから「整形外科」と混同される患者さんも少なくありませんでしたが、最近では「美容外科」と同一視する方も増えてきているようです。美容形成外科医のマスメディアへの露出の増加や、アンチエイジングへの需要の増加などがその背景になっていると思います。美容外科という分野はあくまで形成外科の中の一分野にすぎません。

当院は公的病院であり、形成外科も保険診療主体です。皮膚腫瘍の手術や、やけど・皮膚外傷、乳房再建、手足の先天異常、陥入爪などへの診療を行っておりますが、先天性のアザへのレーザー治療、手術や交通事故後のキズ跡修正やケロイドの治療、まぶたの下垂の修正など、保険診療が可能で、かつ美容的・アンチエイジング的要素のある診療も行っております。

「美容」以外の形成外科の診療範囲は非常に多岐にわたります。南泉州地域で形成外科の専門的施設は数少なく、地域の方々におきましては、当院が提供する形成外科医療を有効に利用していただきたいと思います。



呼吸器センター長
呼吸器外科部長

桂 浩

当院へ赴任し、早3年目を迎えました。昨年は、皆様のご協力のお蔭で、久々に手術件数が、若干のV字回復をしました。加えて、赴任当初から形骸化していた呼吸器センターの一翼を担う、呼吸器内科が、まだ外来レベルですが

年頭所感

再開されました。

そして、本年は、救命救急センターと統合します。いずれにしても、これまで充分でなかった泉州地域での呼吸器診療の充実には、周術期や救急対応など含め、当科のみでは、限界があります。今後とも、関係各科、部署をはじめ、様々な部門の皆様の協力体制は不可欠です。ので、本年もよろしくお願い致します。



周産期センター
新生児医療センター長
小児科部長

住田 裕

昨年の小児科は、開院以来最小の医師数(常勤3名、研修医1名)で診療を行ってきました。小児救急輪番担当日を減らしていただいたり、NICUの応援当直に来ていただいたり、いろいろと助けていただいた方々・医療機関に御礼申し上げます。

今年は、外に研修に出ていた医師も戻ってきますので、現状の診療体制に戻します。と同時に、より子育ての支援につながればと、予防接種業務を復活させ、また地域での乳幼児健診や二次健診にも参画すべく、泉佐野市、泉南市、熊取町と今後の二次健診のあり方を含めて検討中です。病院の中だけでなく、地元で子育てのお役に立てれば幸いです。どうぞよろしく願います。



周産期センター
産科医療センター長
産婦人科部長

萩田 和秀

安心・安全な産婦人科・周産期医療を目指して!!
本年8月で泉州広域母子医療センターはフルオープンから丸4年を迎えました。

りんくう総合医療センターでは24時間365日、常に産科医2人以上、新生児専門の小児科医1人以上が待機し、安心・安全に重点を置いています。現在分娩数は年間約1,100件あり、そのうち高度な周産期医療技術が必要なお産が半分を占めます。

また、お産後の大量出血や危険な分娩を一般分娩施設からお受けする。緊急母体搬送は年間200件近くあり、一部の合併症を除いて泉州南部の「ハイリスク妊娠」のほとんどを受け入れることができるようになっていきます。

りんくう総合医療センターの産婦人科では、「正常妊娠・正常分娩」の方にも分娩・育児していただくため、助産師外来の拡充、4D超音波の導入、妊婦さんのためのマタニティヨガやオイルマッサージなどを取り入れました。更に、当院で分娩後、すぐにアイスクリームをサーブスしており、産後食としてお祝い膳もご用意しております。

どなたでも安心してお産ができるよう、どなたでもリラクゼーションして育児を開始できるよう、スタッフ一同頑張っていくつもりですのでどうぞよろしく願います。



泌尿器科部長

萩野 恵三

地域の皆様、あけましておめでとうございます。りんくう総合医療センター泌尿器科萩野恵三(はぎのけいぞう)です。2012年は地域住民の皆様の絶大なるご支持と地域でご活躍されている実地医家の先生方のご支援のおかげで、当院の泌尿器科診療は外来、入院手術、病棟とも多忙を極めた1年となりました。

予約外受診の患者さんにつきましても、紹介状持参の有無にかかわらず、誠心誠意、丁寧に診察させていただきます。いるところですが、最近はとみに患者さんの増加が著しく、常勤医3名という限られたマンパワーで限界もみえます。予約外受診の患者さんにおかれましては待ち時間が長くなる点のご了解とご理解をよろしく願います。2013年も、少しでも泉州地域の医療に貢献できるように努力していく所存です。今まで同様にあたたかく見守っていただければ幸いです。

眼科部長

村井 克行

医学の進歩は早いもので、とりわけ眼科の進歩も目覚ましい。例えば網膜の診療、以前は眼底鏡観察や網膜血管造影検査が主であったが、ここ数年で非侵襲的なOCT検査、自発蛍光検査なども台頭している。より詳細な観察が可能となり、病態の解明や治療が一層進んでいるようにも思われる。ただ、現在眼科勤務医数は年々減少傾向にあり、非常勤でまわす病院も多くなってきた印象を受ける。

また、昨今の病院運営の厳しさからか機器購入や老朽化した機器の修理もままならない。そんななか新年を迎えるわけだが、これから先ますます厳しくなってくると思うが、今年も日々の診療に邁進するべく努めようと思う。今日この頃です。



耳鼻咽喉科部長

萩田 猛真

昨今、医師不足が話題になっており

ますが、耳鼻咽喉科も例外ではありません。この地域では、入院手術が可能な施設は、岸和田市民病院から和歌山労災病院の間には当科しかありません。その中で、地域の中心病院たるべく、幼児難聴、人工内耳から癌治療まで幅広い耳鼻科疾患に対応しております。当科は昨年11月より1名増え、4名となりました。より一層幅や深みのある医療を行っていきたいと考える次第です。

最後になりましたが、皆様、良い年でありますように。



歯科口腔外科部長

大前 政利

あけましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。

大阪大学歯学部は29校の歯学部の中で、その一分野である口腔外科も自ずとその使命を背負い、研究・臨床、後進の指導を担っていた。2001年当院に赴任の指示がありました。さて、口腔外科は字面のままで、口腔領域の外科ということになります。その歴史から顎顔面領域の疾患全般を扱ってきました。

私が入局した時の作田正義教授は、自身が大阪大学歯学部に入学したときから頭頸部癌治療に傾倒していたという、異色の存在で、教室ではそれはそれは厳しい指導をうけてまいりました。大学を出て不安を抱える一方、封建的な体質のまだのころの大学ではできないことが、当院に赴任してできるようになりました。単科ではできない質の高い医療の実践です。大学にはない科との関わりはもちろんのこと、単科ではできない診察と治療ができるようになり

ました。その利点を最大限に生かしたのが『あきらめないがん治療』です。さらにたまたま、赴任直後より京都大学原子炉実験所のホウ素中性子捕捉療法(BNCT)に携わることができ、世界で初めて頭頸部癌にBNCTを行いました。そこからどんどん、多くの先生方との交流ができ、癌治療の引き出しが増えました。大阪大学口腔外科が唇顎口蓋裂や顎変形症の治療にも伝統があり、若いときからその治療に携わっていたことで腕も形成もできる口腔外科医として腕を磨けました。まだまだこの地で腕を振るえると考えていますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

今年も年間3600件を超える手術、2400件を超える全身麻酔を目標に、患者様にとって安全かつ快適な手術環境を、安定供給していく所存です。手術をお受けになる患者様、どうぞ安心して私たちの手術室へおいで下さい。



放射線科部長

櫻井 康介

今年も年間3600件を超える手術、2400件を超える全身麻酔を目標に、患者様にとって安全かつ快適な手術環境を、安定供給していく所存です。手術をお受けになる患者様、どうぞ安心して私たちの手術室へおいで下さい。

今年も年間3600件を超える手術、2400件を超える全身麻酔を目標に、患者様にとって安全かつ快適な手術環境を、安定供給していく所存です。手術をお受けになる患者様、どうぞ安心して私たちの手術室へおいで下さい。



中央手術室長
麻酔科部長

小林 俊司

当院の海側からは、離着陸する飛行機がよく見えますが、それを見るたびに、私は手術室のことを思い出します。というのも、私たちが日々行っている手術麻酔は、よく航空機のフライトに例えられるからです。離陸(麻酔導入)、巡航(麻酔維持)、着陸(覚醒)といった具合です。それだけではありません。入念なフライトプラン(麻酔計画)、機体整備(始業前点検)なども似かよっていますし、最重要なのが安全の確保であることも同様です。

手術室や麻酔科の業務は、直接脚光を浴びることは少ないですが、航空機が黙々と飛び続けるように、病院機能が縁の下で支えています。

以前は、「死なずに眠っていればいい」程度の麻酔が主流でしたが、医療の進歩した現在、それだけでは不十分と言わざるを得ません。乗客が快適なフライトを望むのと同様、術後に痛みや吐き気などの極めて少ない、快適な麻酔が不可欠になってきました(術後快適であるためには、術中からそうである必要があります)。

また、目に見える部分だけではなく、例えば非常事態に即応する能力も研ぎ澄ましておかげなびなりませんし、常に最新のスキルや医学情報を取得し、手術室や麻酔の質を高く維持しなくてはなりません。私たち手術室スタッフは、日々このようなことを念頭に置き、高いプロ意識を持って業務にあたってきましたし、これからもそうありたいと思っています。院内他部署の皆様には、常に手術室をサポートしていただき、心より感謝しております。引き続きご協力をお願いいたします。



検査科部長

今北 正美

りんくう総合医療センターと泉州救命救急センターの統合に先駆けて、昨年の4月より両検査部は出向という形で人事を一体化し、りんくうの臨床検査技師が救命センターの日常業務を分担するとともに救命センターの技師がりんくうの日常業務に参加して、統合の準備をすすめてきました。その過程で、同じ臨床検査部といえながら、診療内容の相違により業務内容、運用形態のみならず業務に対する意識、姿勢の違いに驚かされることも多くあり、一種のカルチャーショックを経験しました。お互いのいい面を残しながら、業務を効率化し、検査業務の内容の充実と質のさらなる向上をはかれればと考えています。今年、病院の中興の年となることを期待しています。

また癌にかかるリスクを血液の「アミノ酸を測ることによって推定する」「アミノインデックス検査」をいち早く導入し、遠方からも受けに来られています。自分では気付かなくても、知らない間に身体が病気に蝕まれていることがあります。定期検診を受けることで皆様健康な人生をおくれるよう、そのお手伝いをさせていただきます。



健康管理センター長
国際診療科部長

南谷 かおり

【国際診療科(旧国際外来)】
これまで国際外来としてテレビや雑誌等で紹介されてきましたが、登録通訳者数も総数60数名になり常駐スタッフも増え、毎日英語、中国語、スペイン語、フィリピン語、ポルトガル語での対応が可能となったため、平成24年11月から名前を変えました。

病院内で5か国語に対応できるのは日本でも当院のみで、医療通訳に関しては造詣の深い病院として経済産業省や阪大病院からお声がかかり、国際医療に関するアドバイザーとして話し合いに参加しています。今後も、日本語の不自由な外国人が受診しても医療者と患者お互いが困らないよう、サポートして行く所存です。

【健康管理センター】
当院の人間ドックは、予約がほぼ2か月待ちで受診者の皆様にはご迷惑をおかけしておりますが、多くの方たちが毎年受けに来られ、年に一度の逢瀬を楽しみにしております。平成24年度からは従来の脳ドックに認知テストを導入し、日本脳ドック学会が推奨する施設に認定されました。

また癌にかかるリスクを血液の「アミノ酸を測ることによって推定する」「アミノインデックス検査」をいち早く導入し、遠方からも受けに来られています。自分では気付かなくても、知らない間に身体が病気に蝕まれていることがあります。定期検診を受けることで皆様健康な人生をおくれるよう、そのお手伝いをさせていただきます。

副看護局長

藤野 正子

患者様に信頼される、地域に根ざした病院を目指し、救命救急センターと統合によって患者様やご家族の方々にさらに満足して頂ける看護を提供したいと考えています。

そのために、超少子高齢社会の中で、急性期病院の適切な観察と技術をもった看護師を育てるだけでなく、一人ひとりの看護師が環境の変化を的確に

年頭所感

捉え、患者様のQOLを重視したサポートができる看護師を育てたいと考えています。

また、患者様に満足していただくためには、職員自身の職務満足度が高くなければなりません。勤務体制や労務管理の担当者として、生き生きと仕事ができる職場環境を考えて行きたいと思えます。



副看護局長

甲斐 美智子

お正月も明け、新年度に向けての準備に忙しい時期となりました。

4月からは救命救急センターと当院が一緒になって、救命救急医療と専門医療が一つの病院の中で互いに協力して実践していく、一次から三次まで同じ病院で受け入れができるという理想的な病院の形に「希望」を感じています。実際には、一緒にやり、運用が始まると様々な問題が出てくると思います。

しかし、職員全員が同じ目標で「希望」を胸に頑張っていけば必ず道は開けると信じています。

病床管理的にはさらに困難なことも多くなるとの覚悟を決め、頑張りたいと思います。今年もよろしくお願ひいたします。



副看護局長兼教育責任者

鈴木 千晶

自身の戴帽式以来、今年度看護学校の宣誓式(戴帽式)に出席させていた。そこでナイチンゲール誓詞を聴き、久しぶりに厳かな気持ちになった。そこには、短い文章の中に看護の全て

が凝縮されており、改めてナイチンゲールの素晴らしさに感動を覚えた。誓詞の中に「我がつとめを忠実につくさんことを」「我が力の限り我がつとめの標準を高くせんことを努むべし」とある。

平成25年4月いよいよ救命救急センターと統合され「ひとつ」になる、と私達は宣言している。一人ひとりが自ら質を高めるための努力をし、個が集まってお互いを認め合い、ベクトルを合わせ「ひとつ」の組織を作っていく、より高いものを生み出していく。「One for all All for one」が基本であり、それを「継続・永続」させるということが本当に「ひとつ」になる事だと思っている。



中央手術室看護部長

藤原 妙子

昨年は、目標である手術件数300症例/月をほぼクリアし経営に大きく貢献できたと自負しております。

手術室という場所は病院において中心となる場所です。麻酔科と深く連携を持ちつつ、あらゆる診療科や病棟外来部門と関わり、一人でも多くの患者様に治療の場を提供することが、泉州地域の中核病院手術室の役割であると考えています。

多くの手術に対応するにはレベルの高い知識や技術を持つことはもちろんですが、チームで仕事をしている以上はスタッフ間のコミュニケーションが重要です。手術室では挨拶や声の掛け合いだけでなくフィッシュ活動の一環としてレクリエーションを取り入れチームの結束を高めています。今年度の手術室は、これまでできていなかった手術待機家族へのサービス向

上を中心に手術看護の充実を図りたいと考えています。今年もよろしくお願ひします。



中央放射線部看護部長

渡邊 久代

新年、明けましておめでとうございませう。新年にあたり今年はどうなるのか、昨年はどうだったのか振り返っています。

今年度は救命救急センターと一体化されるため中央放射線科の役割はさらに重要になるとともに大きく飛躍するチャンスでもあります。中央部門として緊急性の高い症例を今以上に速やかに受け入れ、安全に治療、看護ができることを目標にチームとして頑張っています。

最近読んだアスリートの本に「宿命は変えられないけど運命は変えられる」とありました。自分にしかない強みは何かを考えその強みを存分に発揮しようとするのが大切だということ。私も私らしい看護、チーム作りにこだわって過ごしたいと思っています。それはどのような時も相手を気遣い感謝の気持ちを忘れないこと、夢をかなえる自分を意識してプラスの感性を磨くこと、周りの人のよいところは素直にほめることです。(A)できていなければ注意して下さい。



ICU/CCU病棟看護部長

川島 孝太

昨年4月よりICU/CCU看護部長の任に就き、看護に管理にと必死に走り抜けた9カ月でした。「よかれと思

うことは何でもやってみよう」を念頭に、がむしゃらに駆け抜ける中で、人と人との繋がりが、心の交流の温かさを感じ、看護ってやはり素晴らしいと思う反面、信頼関係の構築や人材育成の難しさ、看護の責任の重さを強く感じた9カ月でもありました。



5階海側病棟看護部長

濱 裕代

平成9年の新病院開院時は、7科の混合病棟でスタートしました。平成25年の救命救急センターとの統合後には、脳神経外科・神経内科・口腔外科・救急科で再スタートの予定です。診療科の編成がどのように変わっても5Sの看護への姿勢は変わりません。5S(知る・承認・信頼・真剣・真摯)で一丸となり、看護に取り組みたいと思います。

知る：患者様・家族・他の医療スタッフ・同僚のことを知り、自分のこと。も知ってもらいます。

承認：相手の存在を気づいて認め、認められたことを伝えることに努めます。

信頼：お互いのことを信じて頼ります。認められ受け入れられる関係を作ります。

真剣：何事にも本気で取り組みます。真摯：いつでも、まじめに熱心に取り組み、一貫した正直さ「一貫した誠実さ」を持って看護に取り組みます。



6階海側病棟看護師長

松本 由美

新年、明けましておめでとうござい
ます。昨年も、皆様方の指導・助言を頂
き新しい年を迎えることができました。
今年も、泉州救命救急センターとの「統
合」となりますが、「Win・Win」の
ような関係で、良い結果が得られるよ
うになれば良いと思います。

また、病棟でも「Win・Win」||自
分だけが良いのではなく、良い看護を
するために協働する事を忘れず、相手
を思いやり・勇気を持って一歩ずつ前
進できるように心に刻みながら頑張っ
ていきたいと思っています。



NICU/GCU看護師長

西出 あや子

今年度の部署の基本方針に協心努力
(きょうしんりくりよく)を掲げていま
す。質のよい医療・看護を提供するた
めには、個人プレーだけでなく周産期セ
ンター全体が心を一つにし、協力し合
うことが大切です。2月以降には産科・
小児科が協働し、スタッフを対象にし
た新生児蘇生法「専門」コースの講習会
を定期的に開催する予定にしています。
赤ちゃんやご家族に安心して過ごし
てもらえるような体制を整え、今年も
頑張っていきたいと思っています。



6階山側病棟看護師長

福島 ひとみ

当病棟は、南泉州地区の産婦人科医
療を支えるために乗り出した泉州広域
母子医療センターです。フルオーブン
して丸4年。年々、高度な周産期医療技

術が必要な分娩が増えつつあり、私た
ち助産師・看護師は、24時間、365日
産婦人科医・小児科医とともに安心安
全な周産期医療を提供できるようにか
んばっています。

産婦人科外来と一体化したこと、
妊娠中の情報やリスクの把握がスムー
ズに行えるようになり、早期に問題解
決ができた、医療相談の方や地域に
つなげることができるようになりました。

また、両親学級はじめマタニティ
ヨガや助産師外来、分娩後にはアイ
スクリームの提供や祝い膳のサービ
ス、2年前からは完全母児同室を開始し
、オイルマッサージを取り入れた母乳育
児にも力を入れています。

少子化が進む中、いろいろと工夫を
しながら一人でも多くの方が当病棟で
分娩できたことを喜んでいただけるよ
うに、他施設の重症症例や貧困で受診
できなくて困っている人の最後の皆地
域の受け皿)となろうと思っています。
そして、医療事故なく、実績ある一年に
していきたいと考えています。よろし
くお願いいたします。



7階海側病棟看護師長

南 昌子

2012年度、病床が減少したり増
加したり、さらには病床編成で4科の
診療科が入る混合病棟になり重症度が
増したりと7海は激動の1年でした。
2013年度は耳鼻科と整形外科の病
棟になることが決定されています。耳
鼻科と整形外科の周手術期を担当する
ことになり、さらなる看護師のレベル
アップが必要になりますが、さらに大
きく変化して行くこうとしているりんく

う総合医療センターで、乗り遅れるこ
とがないよう、また患者様一人ひとり
によりよい安全な看護が提供できるよ
う、病棟を盛り上げていきたいと思
います。



7階山側病棟看護師長

奥出 恵子

救命救急センターとの統合がもう目
前に迫っています。新しい出来事に人
間は、「まだかまだか・どうなるのか」な
どの感情を抱き日々過ごすものです。
旅行に例えるなら、旅行に行く日まで
が一番楽しいということ。今まさ
しく私の心の中はそのような状態です。

しかし、冬が大嫌いで冬の季節はな
にかにつけ縮こまりがちな弱い自分が
います。暖かくおらかな春をただた
だ待つのですが、ある朝突然、布団から
寒さを覚悟して起きると、「あれ、寒さ
が和らいでいる」と感じる時がありま
す。春の到来！その時の感覚は何とも
言えません。統合と春の到来を楽しみ
に、第七感を研ぎ澄まし、そして良い意
味で人に関心を持つおせっかいさを武
器に、役割に与えられた責務を確実に
実行しながら、患者様、病院のために一
つでも誇れる看護ができるよう頑張っ
ていきたいと考えております。



8階海側病棟看護師長

藤原 由子

平成25年、りんくう総合医療センタ
ーと泉州救命救急センターが統合する
年を迎えました。私自身、この2年間は
微力ながら8階海側病棟および救急外
来を通して、救命センターとの協働に
むけた看護の基盤作りに関わって参り

ました。そんな私も一市民として、今年
4月から救命センターと統合すること
によって、どのように変わっていくの
か楽しみでもあります。

また、私のような市民の方々がたく
さんいらつしやることと思います。そ
んな思いを胸に、今年はいよいよ一層の努
力を惜しまず、常によい看護が提供で
きるよう、貢献していきたいと思いま
す。今年も8階海側病棟・救急外来の看
護師共々、よろしくお願いいたします。



8階山側病棟看護師長

高島 麻由美

師長になって4年目を迎えています。
毎年、何やら課題が沸いてきて、その都
度、周りの方々に助けられながら必死
で取り組んできました。それでも、思う
とおりに物事が運ばず、悔し涙を流す
日もあり、「ああ、やっぱり管理職には
向いていないな」と実感する次第です。
が、そんなことを言っている立場で
ないことも承知!!ある患者様から「こ
この看護師さんは、みんな元気がよく
ておもしろいこともポンポン返してく
れる」と言われました。そう！私のモツ
トーは「笑」。これがスタッフにも浸透
している？のだとすると、もつとたく
さんの患者様とスタッフの笑顔も増え
るように日々精進していきたいと思
います。



院内感染対策室副室長

大野 博美

昨年より厚生労働省から感染防止対
策地域連携加算が導入され、日本国内
で地域の医療施設と連携して感染対策
をおこなうように進められています。

年頭所感

感染対策は院内だけでの問題ではなく、地域で取り組むことが大きな課題とされていますが、施設よっての感染対策がバラバラです。個人的には、まだまだ院内の感染対策に追いつかれていない毎日ですが、地域の感染対策カンファレンスで少しずつ前進できるように取り組んでいけたらと思います。



薬剤科部長

森 朝 紀 文

昨年、薬学部6年制1期生の薬剤師が誕生したことをご存知でしょうか？2年間延長したことは、患者さんだけに優れた能力を持つて薬の専門家としての活躍が期待されています。また、それに関係するかは不明ですが、病院薬剤師にとって念願であった病棟薬剤業務実施加算が診療報酬で認められました。このことは、医師・看護師不足による役割分担を薬剤師が担うように社会的にも期待されていると思われま



放射線技術科長

小 西 康 彦

新春のお慶びを申し上げます。放射線技術科では、昨年同様に必要な画像診断や検査を必要なタイミングで実施できる体制を心掛けてまいります。最近放線部門においても、画像診断機器やIT環境の進歩により、より侵襲の少ない検査方法へと変わりつつあります。こ

れらに対応するためには、常に各技師のスキルアップが必要となり、今後も努力していきたいと考えています。当院でも本年3月にMR装置の更新が予定されており、皆様に最新のMR検査を提供できるようになります。工事開始から安定稼働するまでの数カ月間は、皆様にご迷惑をおかけしますが、ご理解よろしくお願ひします。



中央検査科長

三ノ浦 保 彦

本年も引き続き、検査の迅速化による「外来待ち時間の短縮」を、検査技術の更なる向上による「診療支援」に、チーム医療の一員として貢献して行きたいと思ひます。

今年4月、泉州救命救急センターの当センターへの移管統合が予定され、臨床検査部門も一体化されます。昨年取り組んできた三次救急への検査体制をまとめる時が近づいて来ましたが、高度救急医療の検査についても、万全の体制で臨んで行きたいと思ひます。



臨床工学室長

瀧 脇 栄 治

謹賀新年、今年4月に「ひとつ」(りんくう総合医療センターと泉州救命救急センター)になります。臨床工学室では、りんくうCCE(9名)と救命救急CCE(2名)が一体となつて業務を進めていきます。それぞれの部署でFullに働いている中、「ひとつ」に成つて業務内容を充実していくには、業務量の増大、質の向上が必須です。臨床工学技士一同知恵を出し合い切磋琢磨し、堅実に業務を進めていく覚悟です。昨年同様、

本年もご協力・ご指導のほど、よろしくお願ひいたします。



リハビリテーション科技術科長

藤野 文 崇

今年、りんくう総合医療センターと泉州救命救急センターの統合という大きな節目の年となります。リハビリテーションを提供する患者様の病態もより一層多様化することになることが予想されます。その中で、リハビリテーションで「どのような介入が適切なのか」を考えながらリハビリテーションを発展させていきたいと考えております。今年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



大阪府立泉州救命救急センター副所長

水 島 靖 明

泉州救命救急センターは、独立型の救命救急センターとして、泉州二次医療圏の重症外傷や重篤な患者を受け入れてきました。平成25年4月に、りんくう総合医療センターとひとつの病院となり、さらなる急性期医療水準の向上を目指してまいります。すでに平成24年からは脳卒中、循環器疾患の診療一元化を行い、専門医と救急医が協力して、初期診療を行う体制を開始しており、4月からはICUを18床に大幅に増築し、重症患者の受け入れも大幅に増えております。

さらに、りんくう総合医療センターとの連携としては、Accute Care Surgery(急性期外科)センターを外科とともに立ち上げ、急性腹症などの外科的急性患者の受け入れの集約化を始めた所でありま

もともと泉州救命救急センターでは、泉州二次医療圏の重症外傷患者を集約し、多数の重症外傷患者を受け入れてきた実績から、外傷教育も常にリードしてきた経緯があります。現在は外傷手術チーム養成のための、独自のコースを大阪府立大学獣医学科と連携し、開発し、運営しております。コースは全国の施設からも受講してきていただけるようになりました。

4月からは、いよいよ、りんくう総合医療センターと統合するため、システムの調整などを行っている段階ですが、泉州救命救急センターにとつても、りんくう総合医療センターにとつても、25年度は新しい、飛躍の年となることになりま



大阪府立泉州救命救急センター副所長

石 川 和 男

明けましておめでとうございませう。本年4月にりんくう総合医療センターと泉州救命救急センターの統合を控え、新たな時代の到来を感じています。私が泉州救命救急センターにお世話になつてから11年余りになりますが、この間の救急医療の変革は凄まじいものでありました。中でも、救急医療が社会的に認知され、その行為が医療従事者や行政からだけでなく、常に国民の皆さまから注目されるようになった事が最大のことであったかと思ひます。

そのためには、我々は常に研さんを積み、最新の医療情報を注視しつつ、さらに良い医療を切り開いていかななくてはなりません。幸い、当センターは、松岡哲也所長のリーダーシップにより、一流大学の救命救急センターにも引けを取らない

日本の救急医療のトップ集団の一つとして認知されるに至っています。りんくう総合医療センターの方々の協力のもと、なお一層の努力をしようと思つていきます。



Acute Care Surgery センター
大阪府立泉州救命救急センター長
急性期外科センター長
初級、手術室長

渡部 広明

各科の諸先生方はじめ、様々な部門の皆様にご協力賜り心より感謝申し上げます。

昨年8月にりんくう総合医療センター外科と大阪府立泉州救命救急センターの両者が共同して「Acute Care Surgery センター（急性期外科センター）」が新設されました。Acute Care Surgery という耳慣れない用語ですが、実はこの領域は全世界的にも新しい領域でありまして、まさにこれから発展していく新たな領域です。そういう意味では未だその講座が開設されている大学は日本にはなく、当センターが開設されたのはその先駆けであり、まさに本邦初の試みであったわけでは

Acute Care Surgery は、外傷外科、救急外科、術後集中治療の3つを柱として欧米で確立された領域であります。元々は外科学の中であった外傷外科学が分かれて救急外科を包括して確立した領域です。重要なポイント、集中治療を基盤とした急性期外科学であるという点で、一般外科領域との違いはここにあります。この基本概念からは集中治療を必要とする外傷外科および救急外科を担当するのがAcute Care Surgery のコアの部分とされま

すが、これに加えて集中治療を要さない通常の急性腹症（虫垂炎や腸閉塞など）などを包括して広い意味での急性期外科を担当するのが「Acute Care Surgery センター」であります。

これほどまでに広い領域の急性期外科を行っていくためには、りんくう総合医療センター外科の諸先生方のご協力はきわめて重要で、救命センターのみでは実施できない鏡視下手術など、より専門性の高い外科技術をも包括して急性期外科診療を進めていくことが可能となります。まさにこれこそが我々の「Acute Care Surgery センター」の強みであります。またもう一つ重要な点としましては、本センターの設置により、この泉州2次医療圏で発生した外傷および救急外科疾患急性腹症を含むを極力この医療圏内で治療完結できる体制をも構築できるものと考えております。

昨年末に第4回Acute Care Surgery 研究会におきまして、当センターの活動について報告させていただく機会をいただきました。大学教授の先生方はじめ多くの皆様から、「これこそ、日本における理想的なAcute Care Surgery の形である」と過分な評価をいただきました。本年1月からはこのAcute Care Surgery 研究会は新たに「日本Acute Care Surgery 学会」へと成長いたしますが、この領域が今後より発展していくことは間違いありません。外傷外科に関して泉州救命救急センターは全国屈指の手術症例数を誇っており、これを包括した新しい領域であるAcute Care

Surgery を日本において牽引するとともに全国に情報を発信していく重要な施設として今後もこのセンターを発展させていかなければならないものと考えております。

今後、症例数の増加も見込まれておりますので、各方面の皆様には多々ご迷惑をおかけする場面もあるかと思えますが、本年も皆様とともに一人でも多くの患者様を救命できるよう全力で診療に当たるとともに、この領域を全国に発信していきたいと考えております。何卒ご協力賜りますようお願い申し上げます。



大阪府立泉州救命救急センター
放射線科技師長 参事

坂下 恵治

関西空港の開港にあわせて設立された泉州救命救急センターに縁あつて就職して18年が経過した。救急医療における放射線技術に特化して業務を行って多少ではあるが技術的な考察も行ってきた。このたび、りんくう総合医療センターと泉州救命救急センターとの統合により、今までの業務に加え一般の外來患者様やりんくう総合医療センターに入院中の患者様の撮影も行うことになり、新しい分野の技術を身につけ、今までに経験のない患者様に対して撮影できることに、私たちがなりに期待しているところである。

担当させていただく患者様の範囲は増えることになるが、放射線を扱うプロとして患者様に技術を提供できる幸せを感じながら、スタッフ全員で毎日大切にしていきたい。



大阪府立泉州救命救急センター
検査室技師長

福田 篤久

平成24年度も、残り僅かとなった。ということは、移管統合が間近に迫っているということである。大阪府立泉州救命救急センターがオープンしたのは、1994年9月（診療を開始したのは10月）であるから、すでに18年半経過したことになる。我々救命センター検査室は、この18年間どれだけのことが出た、どれだけ臨床現場に貢献できたのだろうか…。自責の念にかられるところであるが、ただ救急医療における臨床検査に関しては、トップ集団に加わりたくらいと願う検査室メンバー4人が一丸となつて努力を続けてきたつもりである。

ちなみに、この18年間に検査室4人で執筆した論文や依頼原稿は105編、学会・講演会・勉強会などにおける発表は、298回であった。これらの学術活動については、移管統合後もこれまでと変わることなく、前向きに取り組んでいきたいと考えている。



大阪府立泉州救命救急センター
薬剤科参事

丸田 栄一

ドクターも人間です。間違いもあれば、書き損じもあります。それをチェックして間違つた処方が出ないようにするところが薬局になります。

薬局は、当センターにおいて各部署に薬品や情報を送る丁度、体で言えば心臓部に当たるのではないかと思います。各部署、丁度、各組織がうまく流れ、うまく排泄されなければ、必ず他の組織、部署にも影響が出てきます。その為、すべての部署がうまくいってくれるよ

年頭所感

うにと祈るような気持ちで薬品や情報を送り出しています。

今回、りんくう総合医療センターとの統合という千載一遇のとき、一歩前進の年ととらえ、共々に仲良く頑張っていきたいと思えます。



大阪府立泉州救命救急センター
総看護師長

北村 愛子

新年のお慶びを申し上げます。今年、りんくう総合医療センターと大阪府立泉州救命救急センターがひとつの病院になる年です。より一層協力しあい、地域の未来を支援できる病院になれるよう努力したいと思えます。

私は、命の現場で長い間仕事をしてきましたが、いつも懸命に生きようと努力されている患者さまと、献身的な愛情で支えるご家族さまの力が、病気を癒し治す力の原点だと感じてきました。私たち救急看護の看護師はその力を信じ、地域住民の方々の健康という幸せを護る事に専心しています。そのあり様は、医療者自身の健康な思考、知識、体力、能力を総動員し、自分という人間を使って全力を尽くしていることが殆どです。

救命救急の現場で今まで出会った患者さま方々からこのような御言葉を頂きました。「救われた命、大切に生きていきます」「お願い、どうか助けて下さい」「どうやってこんなことを乗り越えればいいですか」「こんなに病院が親切なところだとは思ってもみなかった」「救ってくれてありがとう」など、苦境の中での表現です。御言葉の中でたった一つ共通することは、『患者・家族(命)

を癒すために、自分たち(いのち)を使って仕事をしている医療への感謝の気持ちと救いへの願い』ということ。このように貴重な言葉を頂ける職域であると感ずるからこそ、これからは医療者が患者・家族に必要とされていることを厳粛に受け止めて、チームで医療活動ができるように努力したいと思えます。

人間が人間を癒すことができる限り、病院というところは、地域とともに成長し続けることができると思えます。患者さまと、ご家族の声を聴きながら原点に立ち戻り、進んでいきたいと思えます。

この新たな年を迎え、「命はいのちで救う」実績を丁寧に積み重ねてゆきたいと思えます。

大阪府立泉州救命救急センター
看護師長

井出 由起子

今年の春は、すべてのスタッフにとって新しい第一歩の年となります。りんくうと救命が統合し、新しい組織体となる記念すべき年度です。組織が変化する貴重な経験をさせて頂いていることに感謝し、日々の業務に取り組んでいます。小さな組織であった救命救急センターはりんくう総合医療センターという大きな組織から多くのことを学び、自分たちの習慣となつていられるのを振り返る機会となりました。

組織の変化はスタッフに苦勞をかける一面もありますが、苦勞に終わらせずに泉州地域におけるよりよい病院作りを目指してみんなで前進したいと考えています。



大阪府立泉州救命救急センター
初療・手術室看護師長

深川 敬子

平成に元号が変わって25年目になります。25年前の私は、看護学生でした。あの頃は将来を考える余裕はなく、ただ看護師になるため、目の前の課題に必死でした。年齢を重ねることに、さまざまな経験をしてきました。考え方や価値観が変わってきていることを実感しています。それが良い方へ変わっているのか、悪い方へ変わっているのか考えてみました。自分自身では良い方へ傾いてきていると思えますが、そうではない部分もあります。

これから、りんくう総合医療センターと泉州救命救急センターの統合という大きなイベントに取り組んでいきます。この大きな山を乗り越えたら、もう少し良い方へ傾けると信じて頑張りたいと思えます。平成25年が、地域の皆様職員にとって良い一年になりますように。一年後、私が笑顔でお仕事できていますように。

大阪府立泉州救命救急センター
ICU総看護師長

河野 純子

昨年、一昨年は泉州救命にとつて大変な年でした。個人の努力だけではカバーしきれない大きな流れの中にあつて、短期間に劇的な変革を求められました。

さらに今年には新たなステージに入ります。私たち救命センター看護師は、「患者の権利を守る」という基本に立ちかえり、目の前のできることから取り組んでゆきます。

巳という漢字には新しい生命、種が作られはじめる時期という意味があるそ

うで、りんくう総合医療センターの一員になるスタートにびつたり年です。この新しい年が大所帯になる私たちにとつて良い年になるように努力してゆきます。



大阪府立泉州救命救急センター
5階山側病棟看護師長

萩原文子

昨年は救命救急センターとりんくうの混合病棟を任せられ、悪戦苦闘しながらもスタッフとともに無我夢中で走り続けた1年でした。そして、無事に新しい年を迎えることができたことは、とてもうれしく、協力していただいたみなさんへ感謝の気持ちでいっぱいです。

今年は、移管という大きなイベントが控えておりますが、別々の組織が一緒になることは、とても難しいと思えます。でも、お互いの伝統を守りながらコラボして新しいものを作るのと同じではないかなあーと思えます。

この新しい風をともに感じながら、まだまだ、発展途上の5山病棟ですが、スタッフとともにがんばって行きたいと思えます。

事務局次長
大阪府立泉州救命救急センター事務局長

唐松 正紀

本年4月に泉州救命救急センターとりんくう総合医療センターの移管統合が予定されております。移管統合により、お互いの施設それぞれのメリットを生かし、より多くの患者様の治療に貢献させていただくことができるものと思っております。

皆様方のおかげで何とか順調に移管に向けての準備が進んでいますが、まだまだやらなければいけないことが多く、これからも頑張つて参りたいと思

④ いますので、ご支援のほどよろしく
お願いいたします。



事務長兼理事長補佐

山本 春雄

今年、日本の政局も変化し、経済浮
揚への政策が次々と出されることと思
います。

失われた10年といわれていた時期は
更に10年延び、失われた20年と言われ
ています。

大きな政策から細やかな政策まで大
胆に行ってもらわないと、戦後の復興
の歴史が薄れてしまうような気がしま
す。

停滞から成長への過程には様々な転
機があるはずで

当院は一時の隆盛から停滞を経験し、
今年、再度の隆盛に向けて大きな事業
のマジ(救命センターと統合)が行わ
れます。

職員の思い入れひとつで事業は変化
します。飛躍は個人個人の力によって
成し遂げられると信じます。

最後に本年もよろしく申し上げます。



経営管理監

本井 治

明けましておめでとうございます。

本年はどんな年になるのだろうか、と
大阪府の北から南への長い通勤の中で
考えています。医療の世界もますます
厳しい時代になるといわれていますが、
医療の質が高く経営の安定した病院が
実力のある病院として存続することが
できます。当センターは多くの可能性
を持っています。それらの一つひとつ
のことに実現させながら、この病院で

働くことが楽しく喜びがもてるような
病院作りが必要だと思えます。
今年、いろいろな意味を込めて、いい
年になりますように!!



総務課長

中下 栄治

みなさん明けましておめでとうござ
います。

早いもので、りんくう総合医療セン
ターも独立行政法人に移行して2回目
の新年を迎えました。今年、当センタ
ーが南大阪の中核病院として本領を発
揮するための正念場となる年であると
考えます。色々なイベントが盛りだく
さんです。

研修センターの新設・救命救急セン
ター業務の移管・病院機能評価の更新・
人事評価制度の導入など...

職種を越え、職員が一丸となつ
て取り組まなければ乗り越えられない
イベントが沢山あります。

他方、病院運営状況は、八木原総長の
もと劇的な快方に向かつておりますが、
まだまだ安心できる状況ではありません
です。現状を継続することが第一条件
であって、尚且つ、如何に救命救急医療
を当センターの運営にリンク付けるか
がポイントとなります。

我々事務職員は、医療従事者が働き
甲斐のある・遣り甲斐のある職場環境
造りを念頭に置いて頑張っていく所存
です。そうすることが、患者のため、市
民のため、泉佐野のためになると考え
るからです。

新年が皆様にとって輝かしい年とな
りますように祈念いたします。



医療マネジメント課長

廣道 敦

24年度より課の名称が医事課から医
療マネジメント課へと変更され、医事
係、診療情報係に新たに地域医療連携
室、相談支援室、栄養管理科(兼)、医師
事務作業補助者(兼)、医療相談室(兼)
が加わり大所帯となりました。患者さ
まと接する事務系の職種のほとんどが
含まれる部署となりました。また、昨年
7月には医事業務についてプロポーザ
ルを実施し従来と同様に日本医療事務
センター(NIC)に委託する事となり、
10月からは社名が「ソラスト」と変更
になりました。

医療マネジメント課では毎日朝礼を
行っています。司会者は2、3分程度の
話題を話し、各係などや委員会から連
絡・報告の進行役をします。従来は係長
級で行っていましたが、12月からは、原
則、全員が司会を担当することになり
ました。一人ひとりが主体的に業務に
取り組み、情報を共有し、ミッションを
実行できる組織になるように日々努力
してまいります。



経営管理課長

北川 和義

新春を迎え、謹んでお慶び申し上げ
ます。

りんくう総合医療センターは独法化
をして3年目を迎えます。経営管理課
では理事会運営、中期計画・年度計画の
推進及び情報管理等の業務を行って
おります。

また、昨年から泉州救命救急セン
ターとの移管に向けての調整業務や両
病院のシステム連携の構築、地域医療

再生計画における泉州南部公立病院機
能連携の推進など病院にとって重要な
業務を行っており、今年も引き続きス
タッフ一丸となつてこれらの業務に取
り組んで行きたいと思っております。



2013年も
どうぞ宜しく
お願い申し上げます。

「第1回 りんくう秋まつり! 2012」において 血管年齢検査を実施しました

医療マネジメント課主幹 高橋 利治

11月3日(土)文化の日にりんくうタウン駅 りんくうパピリオで開催されました、「りんくう秋まつり! 2012」(主催者:大阪府、泉佐野市、大阪府タウン管理財団)に当センターも出展し、一般の方々を対象に血管年齢検査(略称:ABI)を行いました。

当日は、秋晴れに恵まれ、ご夫婦やご家族連れの方が数多く、当センターのブースにもご自身の血管年齢に関心のある方が来られました。

当初の予定人数は、時間配分から30名としましたが、実際に開始すると検査を受けられた方々のご協力によりスムーズに検査が実施され、53名の方々に受けていただくことができました。



検査を受けられた方々の評判も良く、血管年齢を知ることにより、ご自身の健康に対する自信や自覚、運動に対する意欲・積極性が出た等、ご意見等も非常に好意的でした。ブースに設置した血圧計で測定し、基準値と比較されたり、当センターの掲示ポスター、各診療科のパンフレットを見られ、様々なご質問等をいただき、当センターの診療内容、機能等に対する関心の高さを改めて感じました。

当センターのブースに来ていただいた方々や、準備をはじめ、当日ご協力いただいた関係者の方々には、本当にありがとうございました。

りんくう公開健康セミナー

「明日のために考えよう 脳卒中からあなたを守る」

日時 平成25年3月17日(日)

13:00~

場所 泉の森ホール
大ホール

入場
無料



主催 地方独立行政法人 りんくう総合医療センター、産経新聞社

第1部

講演 『ありのままに』 ~二度の脳梗塞を乗り越えて~
西城 秀樹氏

講演 『どこまでできる?脳卒中治療』
~血管内治療を中心に~
りんくう総合医療センター脳血管外科部長 寺本 佳史氏

第2部

パネルディスカッション『脳卒中とどう向き合うか』
~予防から社会復帰まで~

パネラー

- 西城 秀樹氏
- 寺本 佳史氏(りんくう総合医療センター脳血管外科部長)
- 小城 千絵氏(りんくう総合医療センター脳卒中リハビリテーション看護認定看護師)
- 辻尾 厚司氏(野上病院リハビリテーション部 部長)
- 新山 一秀氏(新山診療所院長/泉佐野泉南医師会)

●申込方法

はがき・FAX・メールにて以下の連絡先までお申し込みください

〒556-8662 大阪市浪速区湊町 2-1-57 産経新聞社営業局「りんくう公開健康講座」係
FAX: 06-6633-2197 MAIL: o-kikaku@sankei.co.jp 問い合わせ: 06-6633-9493 (平日10時~17時)

りんくう総合医療センター 府立泉州救命救急センター 看護師募集



あなたにしかできない看護を!

お問い合わせ先

りんくう総合医療センター 総務課総務係
TEL: 072-469-3111(代表)

編集後記

NICE SMILE 54号をお届けします。今回は、新年号として各科・各部署の長による年頭所感を掲載いたしました。

昨年2012年の『今年の漢字』には『金』が選ばれました。昨年は、金環日食の観測やロンドンオリンピックの金メダル獲得などに沸いた一年でした。

今年は、4月にりんくう総合医療センターと隣接する泉州救命救急センターがひとつの病院として新たな一歩を踏み出します。これを大きなチャンスと捉えて、輝かしい未来に向けて飛躍を目指してまいります。皆様にとっても、金メダルに負けない輝かしい一年になりますように。

本年もどうぞよろしく願い申し上げます。

編集委員(地域医療連携室長)中西 賢



人権標語

「人権はみんなが持つものを守るもの」



りんくう
総合医療センター